



敗戦日本の精神的景観：江戸川乱歩の探偵小説に見る戦後社会の歪み

サイカット・ガライ

博士前期課程

ネール大学

sgarai2000@gmail.com

要旨

江戸川乱歩の短編小説『芋虫』は戦争文学における重要な作品として戦争が個人と社会に与える影響を深く掘り下げている。本論文では、『芋虫』を中心に、戦争が人間性を奪い、帰還兵を社会から疎外するというテーマを分析する。本作品の主人公である須永中尉は戦争で四肢を失い、完全に他者の助けに依存する生活を強いられる。その異形化された身体と精神的な孤立は、戦争がもたらす非人間化の象徴である。また、妻との関係を通じて、戦争が夫婦関係やジェンダーの役割に与える変化も浮き彫りにされる。時子は夫の身体に対する嫌悪と興味の入り混じった感情を抱え、夫婦間の権力構造が逆転していく様子が描かれている。本論文ではさらに、アーネスト・ヘミングウェイ作『Soldier's Home』を二次的な参照として取り上げ、戦争後の社会が帰還兵に対して示す冷淡さと疎外感について比較検討する。両作品に共通するのは、戦争経験者が平時の社会に適応できず、孤立を深める様子である。須永とクレブスの心理的で身体的な苦悩は、戦争がもたらす普遍的な問題を象徴している。これらの作品を通じて、戦争の長期的な影響と、帰還兵に対する社会的なサポートの必要性を訴えられている。

キーワード

PTSD、非人間化、疎外、トラウマ、戦争文学、社会的排除



初めに：戦争の残した傷跡

戦争文学¹は、戦争という極限状況がもたらす人間の苦悩や社会の課題を描く重要なジャンルである。このジャンルは、兵士たちの心身に刻まれる傷跡や、彼らが社会へと復帰する過程で直面する困難に焦点を当てることで、戦争の真の姿を浮き彫りにする。特に、日本の推理小説作家である江戸川乱歩は、その独自の視点から戦争の影響を描き、人間心理の暗部を鋭く抉り出した。その代表作の一つである短編小説『芋虫』は、戦争がもたらす非人間化やトラウマ、社会的疎外を描いた衝撃的な作品である。『芋虫』の話は、戦場から戻った後に四肢を失い、声を発することもできなくなった主人公の須永中尉を中心に展開される。この物理的な変容は、戦争が人間から人間性を奪い取る恐怖を象徴している。また、彼の妻である時子との複雑な関係は、戦争がもたらす心理的な緊張や道徳的境界の崩壊を浮き彫りにしている。乱歩はこの作品を通じて、戦争が兵士やその家族に与える莫大な代償を描くと同時に、戦争の美化や英雄視に対する批判を提示している。

このようなテーマは、アメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイの短編小説『Soldier's Home』²にも見られる。この作品では、戦争の心理的影響が主人公クレブスの孤立感や感情的な麻痺として描かれている。クレブスが戦後の平和な社会

¹ 戦争文学とは、戦争そのものや戦争が人間、社会、文化にもたらす影響を主題にした文学ジャンルを指す。このジャンルでは、戦争の恐怖、暴力、非人間化、道徳的ジレンマ、トラウマ、兵士や民間人の苦悩などが扱われる。特に第一次世界大戦後、このジャンルは大きな注目を集めた。例えば、ヘミングウェイの『武器よさらば』やレマルクの『西部戦線異状なし』などは、戦争文学の代表的な作品として知られている。戦争文学は、戦争の美化に対抗し、その真の残酷さや人間への影響を読者に訴える役割を果たしてきた。

² アーネスト・ヘミングウェイの『Soldier's Home』は、第一次世界大戦の退役軍人ハロルド・クレブスがオクラホマ州の小さな町に戻る様子を描いている。かつての兵士たちの祝福された帰還とは異なり、クレブスの帰郷は疎外感と断絶によって特徴づけられている。この静かで深遠な話は、帰還後兵たちが抱える心理的負担を反映し、戦争が終わった後も彼らが持っていく見えない傷跡を描いている。



に適応できず、家族や地域社会との関係を失う様子は、戦争がもたらす目に見えない傷跡を象徴している。『芋虫』とは異なり、身体的なトラウマではなく、精神的な疎外が中心となる点で異なるアプローチを取っているが、どちらの作品も、戦争がもたらす非人間化や社会からの孤立という普遍的なテーマを共有している。本論文では、江戸川乱歩作『芋虫』を中心に、戦争が引き起こす非人間化、トラウマ、社会的疎外というテーマを分析する。また、ヘミングウェイの『Soldier's Home』を参考作品として取り上げ、異なる文化背景の中でこれらのテーマがどのように表現されているかを比較し、戦争の普遍的な影響について考察する。これにより、戦争文学が現代社会においてどのようなメッセージを持つのかを探求していきたいと思う。

作家紹介

江戸川乱歩（本名：平井太郎、1894年10月21日生まれ、1965年7月28日没）は、日本の推理小説作家で、日本における探偵小説の礎を築いた人物として知られている。彼の筆名は、彼が深く敬愛していたアメリカの作家エドガー・アラン・ポーに由来している。乱歩は三重県名賀郡名張町で生まれた。2歳のときに父の転勤で三重県鈴鹿郡亀山町に移り、翌年には愛知県名古屋市に転居した。幼少期から旧制中学卒業までの15年間を名古屋で過ごし、この期間が彼の人格形成に大きな影響を与えた。小学生の頃、母に読み聞かされた菊池幽芳訳『秘中の秘』が、探偵小説との最初の出会いとなった。旧制愛知県立第五中学校を卒業後、早稲田大学の政治経済学科に進学した。

大学卒業後、乱歩は貿易会社社員、古本屋、支那そば屋など多くの職業を経験した。1923年（大正12年）、博文館の雑誌『新青年』に処女作『二銭銅貨』を発表し、作家としてデビューした。以降、『D坂の殺人事件』や『陰獣』などの作品を次々と発表し、名探偵・明智小五郎を生み出した。また、児童向けの『怪人二十面相』や『少年探偵団』なども執筆し、幅広い人気を集めた。戦時中、乱歩の作品は



軍部の検閲や弾圧の対象となり、執筆活動が制限された。特に、太平洋戦争中は探偵小説が「軟弱」と見なされ、発表の場が限られた。このような状況下で、乱歩は福島県に疎開し、終戦を迎えた。彼は自身の著書『探偵小説四十年』の中で、終戦時の心境を「私はその時、大腸カタルが治らないで、骨と皮ばかりになって寝ていたのだが、その病床で、私は探偵小説はすぐに復活すると考えた³」と記している。この記述から、戦時中の抑圧的な状況下でも、探偵小説の復興に対する強い信念を持っていたことが窺える。

乱歩の作品の中で、戦争を直接のテーマとしたものは多くないが、短編小説『芋虫』がその代表的な例として挙げられる。この作品では、戦争で四肢を失った帰還兵の悲惨な状況と、それに伴う人間の心理的变化が描かれている。また、戦時中に執筆された『防空壕』という作品も存在している。この作品では、防空壕という戦時下の特殊な空間を舞台に、人々の心理や社会の状況が描かれている。これらの作品を通じて、乱歩は戦争が人間にもたらす深刻な影響や、社会の暗部を鋭く描写している。

戦後、乱歩は探偵小説の復興と発展に尽力した。1947年（昭和22年）には探偵作家クラブ（後の日本推理作家協会）の初代会長となり、1955年（昭和30年）には自身の寄付を基金とした江戸川乱歩賞を創設し、後進の育成にも力を注いだ。また、1959年（昭和34年）には紫綬褒章を受章し、その功績が広く認められた。晩年は東京都豊島区にある立教大学の隣の邸宅に移り住み、70歳でこの世を去った。彼の邸宅は現在、立教大学が管理する「旧江戸川乱歩邸（大衆文化研究センター）」として保存されている。

江戸川乱歩は、日本の推理小説界に多大な影響を与えた作家で、その作品は現在も多くの読者に愛されている。戦争という過酷な時代を経ても、彼の創作意欲は衰えず、戦争が人間や社会に及ぼす影響を鋭く描写した。その中で短編小説『芋虫』

³ <https://dot.asahi.com/articles/-/118160>



は、戦争の恐怖とその後遺症を取り上げた作品として特に重要である。本論文では、この『芋虫』を中心に提起し、戦争がもたらす非人間化や社会的疎外というテーマを深掘りし、その文学的・社会的意義について分析していく。この作品を通じて、乱歩がどのようにして戦争の悲劇を描き、人間性の喪失や戦争後の社会の課題を浮き彫りにしたのかを探求していく。

江戸川乱歩作『芋虫』における身体的及び心理的恐怖

江戸川乱歩の短編小説『芋虫』は、戦争によって引き起こされた身体的と心理的なトラウマを不気味に描いている。本作品は戦場で重傷を負い、四肢を失い声さえかけられない須永中尉という兵士の帰還を語っている。ヘミングウェイ作

『Soldier's Home』が帰還兵の感情的および社会的な疎外に焦点を当てているのに対し、『芋虫』は戦争のグロテスクで非人間的な身体的影響に掘り下げ、トラウマ、アイデンティティ、障害に対する社会の認識について探求を展開している。

須永が手足を失い声も奪われた存在へと変貌することは、『芋虫』の中心的なテーマである。身体的な自律性を失い、完全に他者への依存を余儀なくされた須永は、まるで芋虫のように動いている。芋虫は這い回り、身をよじるだけで、自らの運命を制御する力を持たない生き物である。この非人間化された比喻は、戦争の残酷な結果を強調し、かつて誇り高い兵士だった須永を哀れで、ほとんどグロテスクな姿に貶めている。文学批評家マーク・シルバーは、須永の身体的状態は戦争が兵士から人間性を奪い去り、かつての自分の残骸に過ぎない状態にまで引き下げることを象徴する強力なシンボルであると論じている（シルバー，2008）⁴。乱歩の生々しい描写は、須永の身体的状態に対する恐怖と哀れみを喚起し、読者に戦争の負傷

⁴ マーク・シルバーは、20世紀初頭の日本の探偵小説の優雅で独創的な歴史を著した。この探偵小説は、正統な明治小説とはまったく異なる独自の伝統を持っていた。シルバーは、文化が互いにどのように反応するかという大きな理論的疑問に取り組み、江戸川乱歩のような推理小説のジャンルに多大な貢献をした作家たちの新しい解釈を提供した。



という現実を直視させる。『Soldier's Home』のクレブスが抱える心の傷が心理的でほとんど見えないものに対し、須永の負傷は目に見えるほどグロテスクであり、戦争の残虐さを絶えず思い起こさせるものとなっている。この対照的な描写は、兵士を英雄として美化する傾向に挑み、彼らの苦悩を率直に描き出している。

須永の身体的状態は彼のトラウマの最も顕著な表れである一方で、本作品は彼の苦悩の心理的側面も探求している。須永の帰還は安らぎや癒しをもたらすものではなく、むしろ心理的な苦痛の場となる。妻の時子は当初、義務感と哀れみから世話するが、話が進むにつれて彼女の感情は変化していく。彼女は次第に憎しみを抱き、さらには残酷な態度を取るようになり、トラウマ⁵の影響で生じる複雑でしばしば暗い人間関係を反映している。時子の変化する態度は、戦時の負傷が家族関係に与える大きな負担を象徴している。時子の残酷さは、彼女自身のトラウマや苛立ちの表れとも解釈でき、それは夫の世話をするという圧倒的な重荷に対処するための方法といえる。また、彼女の行動は退役軍人やその家族に対する社会的支援の不足を浮き彫りにし、彼らを戦争の後遺症に対して孤立した状態に追いやられることを示している。須永と時子の心理的な相互作用は、障害を負った退役軍人に対する社会全体の対応を象徴する縮図とされる。須永の存在は戦争の恐怖を常に思い起こさせるものであり、それは時子だけでなく、社会全体が忘れたいと願う現実でもある。この傾向は、兵士がしばしば彼らの必要性を理解する準備ができていない世界に戻らなければならないという不快な現実を反映している。

乱歩の心理的恐怖とグロテスクなイメージの活用は、『芋虫』の衝撃を生む上で中心的な役割を果たしている。不安をかき立てる話のトーンと鮮明な描写は、読者

⁵ 同じようなテーマは夏目漱石作『こころ』(1914年)に探求されている。この小説は、友人Kの悲劇的な死を招いた裏切りに対する罪悪感から、社会から孤立し、深い自己嫌悪に陥る「先生」を主人公としている。この未解決のトラウマが彼の世界観を形成し、不信感と深い道徳的葛藤を育み、最終的には自ら命を絶つという悲劇的な決断に至る。『こころ』は、罪悪感、孤独、人間関係の脆さを描写している。



に須永の状態の生々しい現実を直視させる。この恐怖の応用は、戦争がもたらす非人間化の影響を強調している。文学批評家セス・ジェイコボウィッツは、乱歩の作品が心理的なものと身体的なもの境界をしばしば曖昧にし、トラウマが引き起こす不安感を創出していると指摘している（ジェイコボウィッツ，2015）。「芋虫」という比喩は特に重要である。それは須永の身体的状態だけでなく、彼のアイデンティティや自律性の喪失をも象徴している。芋虫は通常、変態や変化と関連付けられる生き物だが、この場合は停滞や閉じ込めの象徴となっている。須永の状態は、成長や変革の典型的な物語のグロテスクな逆転を表しており、戦争がいかんして人間の可能性を停滞させ、歪めるかを浮き彫りにしている。

江戸川乱歩作『芋虫』における須永中尉の描写は、日本社会が戦争帰還兵に対して抱いていた無関心と疎外感を象徴的に表現している。戦場で両腕両脚を失い、声すら失った須永中尉は、単なる「生存者」として社会に戻されるが、彼の存在は社会から見てほとんど無視されるか、場合によっては不快なものとする。この状況は、戦争中に英雄視され、国家のために奉仕した兵士たちが、戦後の平和な社会においては不要とされる矛盾を反映している。須永の身体的な変容は、単なる個人の悲劇ではなく、戦争がもたらす国家と社会の構造的な問題を象徴している。第一次世界大戦後の日本は、西洋化と近代化を進める一方で、戦争の傷跡を見過ごす傾向があった。経済成長や国際的な地位の向上が優先される中で、戦争帰還兵の心身のケアや社会復帰支援は十分に行われなかった。これは、須永中尉のような人物が社会の中で疎外される背景を形成しており、彼が「異物」として扱われる理由とも言えよう。乱歩は本作品を通じて、戦争が兵士たちに及ぼす身体的・精神的な犠牲だけでなく、彼らを受け入れない社会の冷淡さにも焦点を当てている。

また、この疎外感文化文脈においても重要な意味を持つ。伝統的な日本社会では、共同体意識や社会的役割が重視されており、個人は其中で価値を見出すとされている。しかし、須永のような重度の障害を負った兵士たちは、その身体的な制約から社会的役割を果たすことができず、自らの存在意義を失うことになる。



彼らの孤立は、個人の問題であると同時に、社会全体の問題でもある。このような状況下で、帰還兵たちは社会の一員として認められず、精神的にも肉体的にも二重に疎外される結果となった。さらに、『芋虫』の中で描かれる須永と妻・時子の関係も、この社会的無関心を象徴している。時子は表面的には夫の面倒を見ているように見えるが、実際には彼に対して愛情や共感することができず、逆に彼を「異形の存在」として見ている。このような描写は、個人間の疎外感と社会的な無関心が複雑に絡み合っていることを示している。乱歩は、これらの要素を通じて、戦争帰還兵が抱える孤立感や社会からの断絶を批判的に描いている。

『芋虫』におけるジェンダーと人間関係の役割

江戸川乱歩の『芋虫』において、ジェンダーと人間関係のテーマは、戦争によるトラウマと非人間化の中核を形成する重要な要素として描かれている。本作品では、須永中尉と彼の妻である時子の関係を通じて、戦争がもたらす心理的・身体的な影響が個人間の関係にどのように影響を与えるかが克明に描かれている。時子は話全体を通じて、複雑な感情を抱えるキャラクターとして描かれている。彼女は一見、夫である須永中尉を献身的に世話する「理想的な妻」のように見えるが、その内面には夫に対する嫌悪感や歪んだ好奇心が潜んでいる。須永が戦争によって四肢を失い、自立する能力を完全に奪われたことで、時子は夫を単なる「負担」としてではなく、「異形の存在」として見るようになる。この視点は、時子自身のジェンダー的役割への葛藤を象徴している。彼女は伝統的な「妻」としての役割を果たしつつも、その裏で夫をコントロールする力を得るという矛盾を抱えている。また、戦争によって須永が身体的に無力化されたことで、夫婦間の権力バランスが逆転する。時子は夫に対して優位に立ち、これまでの「従順な妻」の立場から脱却するかのよう振る舞う。この権力逆転は、ジェンダーの固定観念に対する乱歩の挑戦とも解釈できる。須永の身体的な無力さが、時子に新たな自己認識と欲望の形をもたらした点で、この作品は戦争の影響がジェンダーの役割にも波及する。



夫婦関係における心理的な距離感もまた、本作品の重要なテーマである。須永と時子の関係は、戦争による身体的な変化を通じて徐々に歪んでいく。戦前、須永は家庭における「主人」としての地位を持ち、時子もその枠組みに従っていたかもしれない。しかし、戦後、須永が四肢を失ったことで、その地位は大きく揺らぐ。時子は夫を支える役割を担うが、その内心では夫への嫌悪感と新たに芽生えた支配欲との間で葛藤を抱える。この葛藤は、戦争がもたらした「新しい現実」が夫婦間の関係にどれほど深刻な影響を及ぼすかを示している。さらに、時子の心理的变化には性的な側面も含まれている。話の中で彼女が夫の身体に対して感じる「嫌悪と興味の混在」は、戦争がもたらした身体的損傷が単に物理的な問題だけでなく、夫婦間の性的な親密さにも影響を与えることを示唆している。須永の「異形化された身体」は、彼が以前の「夫」としての役割を果たせないことを象徴しており、時子の目には「非人間的な存在」として映る。このような描写は、夫婦関係がいかに戦争の影響を受けるかをリアルに描き出している。

『芋虫』における夫婦関係は、単なる個人的な話にとどまらず、戦争が社会全体に及ぼす影響を象徴している。時子の視点を通じて描かれる須永の「異形化」は、戦争帰還兵が社会的に疎外される現実を反映している。また、時子の内面の葛藤は、戦争後の社会がどのように帰還兵を受け入れるべきかについての道徳的な問いかけを読者に投げかけている。江戸川乱歩は、この作品を通じて、戦争が夫婦関係やジェンダーの役割をいかに変容させるかを探求した。時子と須永の関係は、戦争によって引き起こされた身体的で精神的な破壊が、人間関係の根底にどれほど深い影響を与えるかを示すと同時に、戦争の非人間的な側面を象徴している。このテーマを通じて、『芋虫』は戦争が個人と社会に与える複雑な影響を浮き彫りにしている。



戦争の悲惨さと人間の再生

ヘミングウェイ作『Soldier's Home』と乱歩作『芋虫』は、戦争の影響を受けた帰還兵の心理的および身体的な負担を浮き彫りにしつつ、異なる文化的背景に基づいている両作品は疎外、非人間化、社会の無関心という共通のテーマを共有しており、戦争の真の悲惨さを鋭く批判している。本比較分析では、それぞれの作品においてこれらのテーマがどのように表現されているかを探り、主人公の苦悩、作品の文体、社会的な広がりについて焦点を当てて考察する。

1. 疎外と断絶：帰還兵の内面的葛藤

『Soldier's Home』のハロルド・クレブスと『芋虫』の須永中尉の両者は、帰還後に深い疎外感を味わう。クレブスの場合、この疎外感は主に心理的なものである。彼は家族や地域社会から疎外され、自身の戦争体験と社会から期待される役割との間で折り合いをつけられずに生活を送る。ヘミングウェイは、クレブスを感情的に麻痺し、かつて彼の人生を特徴づけていた愛着や野心に無関心な人物として描写している。このような感情的な切断は、心的外傷後ストレス障害（PTSD）の典型的な症状であり、ジェームズ・ナゲル（Nagel, 1996）が指摘しているように、第一次世界大戦後の多くの退役軍人が抱いた広範な幻滅を反映している。一方で、『芋虫』の須永の疎外感は身体的であると同時に心理的なものでもある。彼の深刻な負傷、つまり四肢と発話能力の喪失は、彼を完全に他者に依存せざるを得ない無力な状態に追いやられた。この身体的変化は須永と奥さんの時子の中に壁を作り出し、時子は哀れみと憎しみの間を揺れ動く。須永の疎外感は、彼がコミュニケーションを取ることができないという状況によってさらに悪化している。これは、障害を負った退役軍人の必要性を理解しようとしないう、あるいは対応できない社会全体の失敗を象徴する比喻とも言える。須永の状態は、兵士たちが戦場や帰還後家庭でしばしば直面する非人間化を象徴している。



2. 非人間化とアイデンティティの喪失

非人間化は両作品に共通する中心的なテーマだが、その表現方法は異なる。『Soldier's Home』において、クレブスはかつての自分の影のような存在に成り果て、情熱や目的を失ったまま、ただ日々を送っている。町の人々が彼に英雄的な戦争体験を語ることを期待するため、クレブスは嘘をつかなければならず、それがさらに彼のアイデンティティを侵食する。このような社会的な圧力は、戦争の美化された物語に従うことを彼に強制し、彼を個人ではなく「シンボル」として扱う。ヘミングウェイの簡潔で控えめな文体は、この非人間化を反映しており、クレブスの戦後の空虚な存在を浮き彫りにしている。一方で、『芋虫』における非人間化は、はるかに露骨である。須永が四肢を失い声も出せない存在に変貌したことで、彼はほとんど人間以下の状態にまで貶められる。「芋虫」という比喻は、この非人間化を象徴しており、須永を人間ではなく一匹の生物として描写している。時子の感情の変化、つまり哀れみから残酷さへの揺れは、アイデンティティの喪失をさらに際立たせる。須永はもはや人間としてではなく、哀れみと嫌悪の対象として扱われている。この非人間化は、障害を負った退役軍人を、自立と尊厳を持つ個人ではなく、社会的な負担として見る傾向を反映している。両作品は最終的に、戦争が兵士から人間性を奪い、彼らをもはや「完全」ではない存在として見る世界で生きることが強いられることを示唆している。ヘミングウェイの描写が控えめで心理的なのに対し、乱歩の描写はグロテスクであり、非人間化というテーマに対する異なる文化的アプローチを反映している。

3. 社会的期待と失敗

両作品に共通する重要な点は、社会が兵士に抱く期待と、帰還兵への支援の失敗に対する批判である。『Soldier's Home』では、クレブスの家族や地域社会は、彼が無理なく再び社会に溶け込み、伝統的な価値観に従うことを当然のように求める。母親が彼に祈りをするように促し、人生を前向きに生きるよう強く勧める場面は、戦争によるトラウマという現実を否定しようとする社会全体の態度を象徴して



いる。このような同調圧力はクレブスの疎外感をさらに深め、退役軍人と一般市民の世界の間に存在する断絶を指す。一方で、『芋虫』では、須永に対する時子の扱いを通じて社会的な失敗が描かれている。時子は最初、義務感を持って彼の世話をしたが、やがてその感情は苛立ちや憎しみに変わっていく。これは障害を負った退役軍人に対する社会全体の無関心を反映している。戦争後、社会は障害を負った退役軍人を受け入れるのに苦労し、彼らをしばしば疎外し、その苦しみを否認してきた。乱歩の作品は、この社会的な偽善を露わにし、読者に戦争退役軍人がどのように扱われているのかという不快な現実を臨ませる。両作品は、社会的期待と帰還兵の現実の間にあるギャップを強調している。ヘミングウェイと乱歩は、従来の英雄話の不十分さを明らかにし、読者に戦争の本当の代償を直視するように促している。

ヘミングウェイ作『Soldier's Home』と乱歩作『芋虫』は、戦争の心理的および身体的影響に関する現代の議論において深い関連性を持ち続けている。これらの作品は20世紀初頭から中期に書かれたものだが、現代の紛争において退役軍人や市民が直面する問題と共鳴しています。PTSD（心的外傷後ストレス障害）による心理的な傷から、戦争による負傷の身体的および感情的な負担に至るまで、この作品は戦争を経験した人々が抱える永続的な苦悩に対する深い洞察を提供している。戦争の心理的影響、特にPTSDは『Soldier's Home』と『芋虫』に共通する重要なテーマで、現代の兵士たちの生活においても中心的な問題となっている。研究によれば、イラクやアフガニスタンでの紛争から帰還した退役軍人は、高い割合でPTSD、抑鬱、不安障害を抱えている。米国退役軍人省のデータによると、イラクやアフガニスタンに従軍した退役軍人の約20%がPTSDを患い、多くは長期的な感情的・心理的困難に直面しているとされている（米国退役軍人省、2021）⁶。この現実、戦争

⁶ PTSD は、アフガニスタンとイラクに派遣された退役軍人と派遣されなかった退役軍人の間で重大な公衆衛生問題となっており、派遣だけに関連する結果と見なすべきではない。米国退役軍人省が実施した調査では、派遣された退役軍人の15.7%がPTSD検査で陽性だったのに対し、派遣されなかった退役軍人では10.9%だけ



を通じて感情を麻痺させられ疎外感を抱くクレブスや、社会から無視され支援を受けられない須永の経験と重なる。

終わりに

非人間化と社会的無視のテーマは、『芋虫』と『Soldier's Home』の両方において中心的な要素で、社会に適応しようと苦闘する兵士たちの、二つの異なりながら相互に関連した話を提示している。江戸川乱歩作『芋虫』では、須永中尉の無力で四肢を失った姿へのグロテスクな変貌が、人間の主体性が究極的に削がれる様を象徴している。彼の体は、戦争が人間性を奪い去る力を示すグロテスクな象徴へと変わる。妻の時子が感じる嫌悪と同時に抱く奇妙な魅力は、彼の非人間化をさらに強調し、もはや一人の人間としてではなく、戦争の産物として見られていることを示唆する。この疎外感は個人的なものにとどまらず、社会的な側面にも及び、須永の状態が日本の軍国主義的な野望と、その実現による深い人間的代償を和解させる苦闘を具現化している。須永の戦争トラウマの身体的表現は、戦争中に兵士を崇拝しながら、戦争が終わった後には彼らを支援しない社会の矛盾を浮き彫りにする。

一方で、ヘミングウェイの『Soldier's Home』は、『芋虫』に描かれたような物理的なグロテスクさは欠如しているものの、同様の非人間化の形を反映している。クレブスが経験する感情の麻痺と周囲からの孤立は目に見えない。だが、深刻な戦争の傷を明らかにしている。彼が家族との関係を修復すると戦前の価値観を再び受け入れることができないことは、戦後の疎外感を鮮やかに描いている。クレブスと須永は、戦時中の経験やトラウマを無視し、平時の規範に従うことを要求する社会によって追放されている。この無視が孤立を永続させ、彼らを戦争と平和の間に取り残し、どちらの世界にも完全に帰ることが出来かねる。

た。調査参加者全体では 13.5% が PTSD 検査で陽性だった。

<https://www.publichealth.va.gov/epidemiology/studies/new-generation/ptsd.asp>



この二人の比較分析は、戦争に関する普遍的な真実、すなわち戦争がその参加者のアイデンティティをいかに粉々にするかを描写する。須永とクレブスは、地理や文化が異なるにもかかわらず、境遇を超えた感情的な共鳴を共有している。この二人は、戦争がもたらす深い変化を理解せず、評価しない社会の中での見えない存在感と格闘している。この平行性は、社会が戦争の美化を生存者のケアとリハビリよりも優先させる仕組みを考えるよう読者に促す。彼らのそれぞれの話は、退役軍人の心理的および身体的ニーズに対応できないシステムの失敗と市民生活に円滑に再統合できない方に付きまとう汚名を批判するものとなっている。

乱歩がグロテスクな身体性を通じて非人間化を探求し、ヘミングウェイが感情的断絶を描いたことは、現代社会における兵士の役割に関する文化的不安をも反映しています。両作家は、戦争のトラウマが戦場を超えて、兵士の存在のあらゆる側面に浸透することを示唆している。それだけでなく、英雄主義や犠牲のような紛争の長期的な影響を取り巻く社会的な話を再考するよう求めている。それぞれの作品は、戦争の身体的および感情的な傷を負う者たちへの共感と改革の必要性を強調し、軍事サービスの美化に伴う不快な真実と向き合うことを伝えようとしている。

『Soldier's Home』と『芋虫』は、戦争による心理的および身体的なトラウマについて強力に心に残る洞察を提供している。時間の経過にもかかわらず、これらの作品に描かれる疎外感、非人間化、社会的無関心というテーマは現代も価値がある。現代の紛争が新たな世代の負傷兵、心身に傷を負った兵士たちを生み出し続ける中で、退役軍人に対する社会的認識と包括的な支援の必要性はこれから切迫したものとなっていく。ヘミングウェイと乱歩の作品は、それぞれ特定の歴史的背景に根ざしているものの、戦争の人的代償⁷と、その生存者たちが長期にわたって苦しむ現実に対する時代を超えた考察を提供している。こうした不快な真実に了承する

⁷ この文脈において、戦争に巻き込まれることによって人間が支払う本当の代償は、人命の犠牲だということを理解すべきである。



ことで初めて、社会は退役軍人に必要なケアと支援を提供し、その方の犠牲を真に尊重することができる。

参考文献

- Baker, Carlos, 1988. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Collier Books.
- Hemingway, Ernest, 1987. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. New York: Scribner.
- Jacobowitz, Seth, 2015. *Writing Technology in Meiji Japan: A Media History of Modern Japanese Literature and Visual Culture*. Harvard University Asia Center.
- Nagel, J., 1996. *Ernest Hemingway: The Oak Park Legacy*. University of St. Thomas.
- Ranpo, Edogawa, 2016. “Imomushi”, Edogawa Rampo Zenshū, Vol. 1, Kadokawa Shoten, pp. 9-29.
- Reynolds, M., 1998. *The young Hemingway*. W.W. Norton.
- Satō, Fumika, 2008. “Uneasy Warriors: Gender, Memory, and Popular Culture in the Japanese Army”, *Social Science Japan Journal*, Volume 11, Issue 1, pp. 169–172. Retrieved from <https://doi.org/10.1093/ssji/jyn015>
- Silver, Mark, 2008. *Purloined Letters: Cultural borrowing and Japanese Crime Literature, 1868-1937*. University of Hawai'i Press.
- US Department of Veterans Affairs, 2023. *National center for PTSD*. <https://www.ptsd.va.gov/>
- Young, Philip, 1966. *Ernest Hemingway, a Reconsideration*. New York: Harcourt, Brace, & World.
- 安蒜貴子, 2020. 江戸川乱歩 「芋虫」 「孤島の鬼」 論: 形作られる肉体をめぐる (Doctoral dissertation, Shirayuri University).
- 石川巧, 2020. 江戸川乱歩 「芋虫」 における “物のあわれ”. *立教大学日本文学*, pp. 54-67.